

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020 年 5 月

「闘争と勇気」「もう一度の機会（Ⅱ）」「守る」「大葉のチヂミ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

もう一度の機会 (II)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気

8

Conflict and Courage

現代の真理

「守る」

40

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「大葉のチヂミ」

44

レシピ

お話コーナー

「キリストの死 (I)」

46

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020年4月5日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: iStock on Front page, Sermon View on page

44

Printed in Japan

わたしたちは贖罪の日にいる

わたしたちは大いなる贖罪の日、すなわちわたしたちの罪が告白と悔い改めによって、前もって裁きへ持ち出される時にいる。…

1844年にわたしたちの大祭司は天の聖所の至聖所に入れ、調査審判の働きを始められた。死せる義人の裁判が神のみ前に再審されるために通過してきた。その働きが完成すると、裁きは生きている者の上に宣告されることになる。これらの厳粛な一瞬一瞬は、なんと貴重で重要なことであろう！わたしたちは一人ひとり天の法廷で保留されている判決がある。わたしたちは個人個人、実際になされた行為にしたがって裁かれることになる。型の奉仕においては、贖罪は地上の聖所の至聖所において大祭司によってなされ、民は神のみ前で魂を悩まし、自分の罪を告白することが要求された。こうしてそれらが贖われて、除去されることができたためであった。この贖罪の日の本体、すなわちキリストが上の聖所でご自分の民のために嘆願しておられ、最終的な取り消すことのできない決定がすべての人の上に宣告されようとしている時にいるわたしたちに、これ以下のことが要求されることがあろうか。

この恐るべき厳粛な時に、わたしたちの状態はどうであろうか？…わたしたちは自分たちがこの世界歴史のどこにいるかを知るために、聖書を調べないであろうか。このときにわたしたちのために成し遂げられつつある働きと、この贖罪の働きが進行している間、わたしたちが罪人として占めるべき立場に関して知的にならないであろうか。もしわたしたちが少しでも自分の救いに関心があるなら、決定的に変わらなければならない。わたしたちは真の悔悟をもって主を求めなければならない。自分たちの罪が除去されるために、魂の深い悔い改めをもってそれらを告白しなければならない。…

わたしたちは速やかに恩恵期間の終わりに近づいている。すべての魂は、わたしは神のみ前にどうであろうかと尋ねなさい。わたしたちはどれほどすぐに自分たちの名前がキリストの唇に取り上げられ、自分たちの判決が最終的に決定されるかを知らない。どのような、ああ、それらはどのような決定であろう！わたしたちは義人として数えられるであろうか、悪人として数えられるのであろうか？（*レヒッド・メッセージ* 1巻「16章リバイバルへの召し」より 124-126）

第 16 課 もう一度の機会 (II)

どのように改心するか？

イエスは聖霊が罪人に自分の誤った道について印象を与えるであろうと言われました。御霊は人に様々な方法で語りかけられます。神のみ言葉によって（記されたみ言葉や語られたみ言葉）、聖霊によって（良心、状況、あるいは日々の経験を通して）、そして自然の働きを通して、御霊は人々に罪を自覚させ、各自が自分の真の状態を認めることができるようにします。

「それ（彼）がきたら、罪と義とさばぎとについて、世の人の目を開くであろう。…けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くとこを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」（ヨハネ 16:8,13）。

ひとたび、なした悪を自覚するとき、罪人はキリストの招きを受け入れることができるようになります。

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ 11:28）。

「わが子よ、あなたの心をわたしに与え、あなたの目をわたしの道に注げ」（箴言 23:26）。

罪人がキリストのもとへ来ると、そこでは他にすることがあります。意志は主の側に連ならなければなりません。そのとき、生活の変化という過程が始まります。

かつて犯していた悪い行為は捨て去られなくてはなりません。罪を告白するだけでは十分ではありません。人は行いを悔い、それらを捨てなければなりません。

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（イザヤ 55:6,7）。

真の悔い改めは、罪を悲しむことと、それから向きを変えることを意味します。ダビデの告白と悔い改めの例に注目しましょう。「神よ、あなたのいつくしみによ

って、わたしをあわれみ、あなたの豊かなあわれみによって、わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。わたしの不義をことごとく洗い去り、わたしの罪からわたしを清めてください。わたしは自分のとがを知っています。わたしの罪はいつもわたしの前にあります。わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、あなたの前に悪い事を行いました。それゆえ、あなたが宣告をお与えになるときは正しく、あなたが人をさばかれるときは誤りがありません。…ヒソブをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう」(詩篇 51:1-4,7)。

新しく生まれた人はどのような人か？

再生、もしくは品性の変化は新しく生まれた子供に例えられています。すべてのものが新しく、希望と心躍らせることに満ちています。愚かな古い生活は、内なる平安というこの活気ある新しい生活とまったく異なっています。新しい旅が反対方向にむかって、すなわち自分が神のみ旨を行っていることを知っている方向にむかって始まります。パウロは次のように言いました、「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」(コリント第二 5:17)。

改心した人は、この地上のものは求めず、まず何よりも神の御国を求めます。「このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない」(コロサイ 3:1,2)。

真の改心の一つの結果は、再び生まれた男女の行いにおいて明らかです。行動、言葉、思想、そして彼らの生活のすべてが、彼らは本当に新しい被造物であるか、あるいは古い罪深い人がまだ生きているかを表します。「あなたがたはたしかに彼に聞き、彼にあつて教えられて、イエスにある真理をそのまま学んだはずである。すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである」(エペソ 4:21-24)。

「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに進み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない」(エゼキエル 33:15)。

「わたしたちは、この事を知っている。わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが減び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。それは、すでに死んだ者は、罪から解放されているからである」(ローマ 6:6,7)。

「最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい」(ピリピ 4:8)。

イエス・キリストのうちにある新しい被造物である人は、なんと幸せなことでしょう。そのように変えられた人は、聖霊の感化の下にいます。新しい思想が彼の思いの基礎を形成します。新しい理性が古い考え方に取って代わります。人はまったく異なる感情や態度を持ちます。新しい原則が生活を支配します。かつては楽しみを見いだしていた事柄を、今は憎みます。神の御国が彼の楽しみのすべてとなります。かつては、彼は悪を行うことを喜んでいましたが、今はそれを憎みます。かつては善をなすことに何の喜びもありませんでした、今はそれが彼の楽しみのすべてとなります。娯楽、ゲーム、また愚かなことに時間を費やしていましたが、今はこれらのことに時間を無駄にすることを嫌悪します。改心の前は聖書を読んだり、讃美したり、祈ったり、教会へ出席しようという願いはありませんでしたが、今はすべてこれらの活動することに喜びがあります。彼がかつては憎んでいたことを愛し、かつては憎んでいたことを今は愛します。すべてが変わりました。これが新しい人です。そうなったのは、キリストが心のうちに宿っておられるからです。誇り高い者が謙遜になり、酔っ払いがしらふになり、不道德な者が純潔者となり、気まぐれな者がまじめになり、嘘つきが信頼できる者となり、無分別な者が慎重な者になります。

人は罪のうちに沈み、悪を行う者の中でも最悪かもしれませんが、なお、彼らは救われて癒されることができます。これが約束です、「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」(イザヤ 43:25)。

「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」(イザヤ 44:22)。

改心した人になることの最終的な報いとは何か？

「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ 1:12)。

考えてみて下さい! なんとという素晴らしい変化でしょう! 改心した人は、あがなわれた神のむすこ娘となるのです。なんとという経験でしょうか! 怒りの子であった者が、そこから天父に養子縁組された子供となるのです。神のむすこ娘となるということは、すべてを意味します。神の家族の一員になるということは、人に授けられる最も大きな栄誉です。

「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである」(エペソ 2:19)。

神の家族の一員として尊ばれるということは、人が受けることのできる最高の栄誉です。それはわたしたちを栄光に満ちた永遠の御国の相続者とします。

「このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である」(ガラテヤ 4:6,7)。

神の子らに約束されている嗣業は、イエス・キリストの栄光に満ちた再臨の時に与えられます。そのとき、このお方は相続人たちに、新地を受けるよう招かれます。「そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい』。」(マタイ 25:34)。

神の子らの嗣業は、全く新しくされた地です。彼らは永遠にわたってそれを受け継ぐのです。「しかし柔和な者は国を継ぎ、豊かな繁栄をたのしむことができる。…主は全き者のもろもろの日を知られる。彼らの嗣業はとこしえに続く。…正しい者は国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる」(詩篇 37:11,18,29)。

闘争と勇気

Conflict and Courage



5月

多すぎる兵士

「主はギデオンに言われた、『あなたと共にいる民はあまりに多い。ゆえにわたしは彼らの手にミデアンびとをわたさない。おそらくイスラエルはわたしに向かってみずから誇り、「わたしは自身の手で自分を救ったのだ」と言うであろう。』」(士師記 7:2)

戦争に出かける前に次のような宣言が全軍に行なわれることが、イスラエルの律法になっていた。『新しい家を建てて、まだそれをささげていない者があれば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ、彼が戦いに死んだとき、ほかの人がそれをささげるようになるであろう。ぶどう畑を作って、まだその実を食べていない者があれば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ彼が戦いに死んだとき、ほかの人がそれを食べるようになるであろう。女と婚約して、まだその女をめとっていない者があれば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ彼が戦いに死んだとき、ほかの人が彼女をめとるようになるであろう』。つかさたちは、また民に告げて言わなければならない。『恐れて気おくれする者があるならば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ、兄弟たちの心が彼の心のようにくじけるであろう』(申命記 20:5－8)。

ギデオンは、敵の数と比較して自分のほうがいかにも少なかったので、いつもの宣言をするのを差し控えていた。彼は、自分の軍隊がまだ大きすぎるという宣告を聞いて、驚きに満たされた。しかし、主は、彼の民の心に誇りと不信仰があるのをごらんになった。彼らは、ギデオンの力強い訴えを聞いて奮い立ったのではあるが、ミデアン人の大軍をながめて恐怖をいだいたものが多かった。それにもかかわらず、もし、イスラエルが勝利をおさめるならば、勝利を神に帰すかわりに、自分たちに栄光を帰してしまったことであろう。

ギデオンは、主の指示に従った。彼は、全軍の三分の二以上の二万二千人が家に帰るのを見て、非常に心を痛めた。(人類のあけぼの下巻 195, 196)

主は、わたしたちのために喜んで偉大なことをなさそうとしておられる。わたしたちは数によってではなく、イエスに対する全き魂の献身によって勝利が得られるのである。わたしたちは、力強いイスラエルの神に信頼しつつ、神の力により、前進すべきである。ギデオンの軍隊の話には、わたしたちのための教訓がある。……主は今日、人間の努力を通して喜んで働こうとしておられ、弱い器を通して偉大なことを成し遂げようとしておられる。(SDA バイブルコメンタリー [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1003)

5月2日

まだ多すぎる

「主はまたギデオンに言われた、『民はまだ多い。彼らを導いて水ぎわに下りなさい。わたしはそこで、あなたのために彼らを試みよう。わたしがあなたに告げて「この人はあなたと共に行くべきだ」と言う者は、あなたと共に行くべきである。またわたしがあなたに告げて「この人はあなたと共に行ってはならない」と言う者は、だれも行ってはならない。』」(士師記 7:4)

すぐに敵に向かって行くつもりで、人々は水ぎわにつれていかれた。進みながら手で水をすくって、急いで水を飲んだ者がわずかながらいたが、大部分は、ひざをかがめて、水面に口をあててゆっくり飲んだ。手を口にあてて水を飲んだ者の数は、一万人のうちわずかに三百人であった。けれども彼らを選ばれて、残りの者はみな、家に帰ることを許された。

品性は、ごく簡単な方法で試みられるものである。危機に際して、自分の必要を満たすことに心を奪われているような者は、危急の場合に信頼できる人ではない。主は、怠惰で放縱な人をご用にお用いになることはできない。主が選ばれる人は、自己の必要のために義務の遂行を遅らせたりしないわずかのの人々である。三百人は、勇気と自制があるばかりか信仰の人であった。彼らは、偶像礼拝によってその身を汚していなかった。神は、彼らを導き、彼らによってイスラエルを救済することがおできであった。成功は、数によらない。神は、多数によると同様に、少数によっても救うことがおできである。神は、神に仕える者の数の大きさよりは、むしろ、彼らの品性によって、栄誉をお受けになる。(人類のあけぼの下巻 196, 197)

キリストの十字架の兵卒であるすべての人々は、よろいを身に着けて戦闘の準備をしなければならない。彼らは脅迫におびえたり、危険を恐れたりすべきではない。彼らは、危機において慎重でなければならないが、敵に立ち向かい神のために戦う際は固く勇敢でなければならない。キリストに従う者たちの献身は完全でなければならない。父、母、妻、子供たち、家、土地などすべてのものは、神の働きの次に置かれなければならない。神の摂理の内に彼が耐えなければならない苦しみが何であろうとも、忍耐強く、快活に喜んで耐える気持ちがなければならない。彼の最後の報いは、キリストと共に不屈の栄光に満ちた御座を分かち合うことである。(SDA バイブルコメント [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1003)

過失に陥る

「ギデオンはそれをもって一つのエボデを作り、……それはギデオンとその家にとって、わなとなった。」(士師記 8:27)

イスラエルの人々は、ミデアン人から救い出されたことを感謝して、ギデオンが彼らの王となり、彼の子孫が代々王となることにしようと申し出た。この申し出は、神政政治の原則とは全く正反対のものであった。……ギデオンは、この事実を認めた。彼の返答は、その動機がいかにも真実で気高いものであったかを示した。「わたしはあなたがたを治めることはいたしません。またわたしの子もあなたがたを治めてはなりません。主があなたがたを治められます」と彼は言った。

しかし、ギデオンは別の過失に陥り、彼の家とイスラエルの全家を不幸に陥れた。大きな争闘に続く不活動の期間は、苦闘の期間以上に大きな危険をはらんでいることがある。ギデオンは、このような危険にさらされた。彼は、不安な気持ちに襲われた。彼は、これまで、神の指示を実行することに満足していた。しかし、今、彼は神の指導を待たずに自分で計画を立て始めた。主の軍勢が大勝利を得ると、サタンは、神の働きをくつがえそうとして、その努力を倍加する。……

ギデオンは、主の使いが彼に現われた岩の上で犠牲をささげるように命令を受けたので、自分は祭司としての役目を果たすように任命を受けたものと考えた。彼は、神の許しを得ようとしなくて、適当な場所を備え、幕屋で行なわれている礼拝に似た制度を始めようとした。一般の人々の強力な支持もあったので、その計画の実行はなんの困難もなかった。(人類のあけぼの下巻 201, 202)

最高の地位に立っている人々が、特に危険がないと感じる時に、誤った方向に導く可能性がある。もっとも賢い者も過失を犯し、最も強力な人もよろめき、つまずくであろう。……

良心から一つの防御を取り除くこと、一つの良い決心を実行するのに失敗すること、一つの悪い習慣を形成することは、わたしたち自身だけでなく、わたしたちに信頼する人々も、破滅させるかもしれないというのは厳粛な思想である。わたしたち唯一の安全は、主の足跡が導くところに従っていくこと、「わたしに従ってきなさい」と言われたお方の保護に絶対的信頼を置くことである。(SDA パイブルメント- [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1004, 1005)

5月4日

赤ちゃんが生まれる前に

「……わたしたちがその生れる子になすべきことを教えさせてください。」(土師記 13:8)

神ご自身がマノアの妻に現れ、彼女が息子を産み、その子は偉大な人となってイスラエルを救い出すはずであることを告げられた。その時神は彼女の食事に関して特別な指示を与えられた。……このことを、世のすべての母親に与えられた指示とみなそうではないか。もしあなたがたが自分の子供たちに調和のとれた精神をもってほしいのであれば、あなたがた自身が節制をしなければならない。あなたがた自身の心と愛情を健全にまた健やかに保ちなさい。それはあなたがたが自分の子孫に健やかな精神と身体を分け与えることができるためである。(原稿 18, 1887 年)

母親はみんな自分の義務を理解することができる。自分の子女の品性は外面的な条件の良し悪しよりも彼らが生まれる前の彼女の習慣と彼らが生まれてから後の彼女の個人的な努力によって非常に大きく決定されるということを母親は悟ることができるのである。……自分の子女の教師としてふさわしい母親は、子供たちが生まれる前に克己と自製の習慣を形成しなければならない。なぜなら、母親は子供たちに自分自身の資質、すなわちその品性の強い特徴や弱い特徴を遺伝させるからである。(食事と食物への勧告第 12 部 20)

賢明でない勧告者は、母親がすべての欲求や衝動を満足させる必要があると勧めるが、こうした教えは誤りで有害である。母親は、神ご自身の命令によって自制を働かせるという、最も厳粛な義務のもとにおかれている。

母親と同様に父親にも、この責任が負わせられている。両親が、彼ら自身の知的、体的特徴、性質、欲求などを子供たちに伝える。(人類のあけぼの下巻 209, 210)

多くの人は節制ということを経く考えている。主はわたしたちの飲食といった些細な事柄を気にかけておられないと彼らは主張する。しかし、もしも主がこれらの事柄に注意を払われなかったのであれば、マノアの妻にご自身を表して彼女にはっきりとした指示を与え、その教えを彼女が無視するといけないので気をつけるよう彼女に二度も命じられることはなかったのである。(節制 233, 234)

妊娠中の影響が及ぼす結果について小さい問題のように考えている親が多いが、神はそうみてはおられない。……ヘブルの母親に語られた言葉を通して、神は各時代のすべての母親に言われているのである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 343)

妥協

「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。」(コリント第二 6:14)

ゾラの町は、ペリシテ人の国に近かったので、サムソンは、彼らと交わって仲よかった。こうして、彼が若いときに結んだ親しい交わりが、彼の全生涯を暗くした。ペリシテ人の町テムナに住む若い婦人が、サムソンの心を捕えたので、サムソンは彼女を自分の妻にしようとした。神を敬う両親は、なんとかして彼の心を変えさせようと努力したが、彼は、「彼女はわたしの心にかないますから」と答えるだけであった。両親は、ついに折れて、彼の希望をかなえ、結婚を許した。

彼がちょうど成人し、神の任命を実行しなければならないとき、他のどんなときよりも神に忠誠を尽くすべきときに、サムソンは、イスラエルの敵と結合してしまった。彼は自分の選んだ者と結婚することによって、神に栄光を帰すことができるか、それとも、自分の生涯によって完成しようとしている目的を達成できない地位に自分をおいているのかどうかをよく問うてみなかった。神をまずあがめようと求めるすべての者に、神は知恵を約束なさった。しかし、自己を喜ばせようとする者には、なんの約束もない。……

キリスト教は、結婚関係に支配的影響を及ぼさなければならないのに、この結合の動機がキリスト教の原則に一致していないことがあまりにも多い。サタンは、神の民にサタンの部下と結合するようにしむけて、自分の勢力を強化しようと常につとめている。サタンはそれを実現するために、清められていない欲望を心に起こそうとつとめているのである。……

サムソンは、彼の結婚式のときに、イスラエルの神を憎む者と親しく交わった。このような関係に自分から進んではいる者は、彼の仲間の習慣や風習に、いくぶんかは従わねばならぬと感ずるのである。こうして費やされた時間は浪費以上にいけなかった。そこでは、原則のとりでを破壊し、魂の要塞を弱める思いをいだき、言葉が語られていた。(人類のあけぼの下巻 211 - 213)

5月6日

力の強い柔弱者

「彼はペリシテびとの手からイスラエルを救い始めるでしょう。」(士師記 13:5)

サムソンを用いて、神が「ペリシテびとの手からイスラエルを救い始める」という約束は実現した。しかし、神の賛美と国家の栄光となり得た生涯の記録は、なんと暗く恐ろしいものであったことであろう。もしサムソンが、神の任命に忠実であったなら、神の目的は、彼の栄誉と昇進によって、成しとげられたことであろう。しかし、彼は誘惑に負け、信頼にそむき、その働きは、敗北と捕囚と死によって成しとげられた。

サムソンは肉体的には、世界で一番強い人であった。しかし、自制、誠実、堅実という点では、最も弱い人のひとりであった。激しい感情の人を強い性格の人と考える者が多いが、実は激情に支配される人は弱い人である。人間の真の偉大さは、その人が支配する感情によるのであって、彼を支配する感情によるのではない。

神は、サムソンが召された働きを達成する準備が与えられるように、常に摂理的に、彼をお守りになった。彼の生涯の一番初めから、肉体的力、知的活力、道徳的純潔を養うためによい環境に囲まれていた。しかし、悪い友だちの感化によって、彼は、人間の唯一の保護であった神を手放し、悪の潮流に流された。義務の道を歩んでいて試練に会うならば、必ず神が守ってくださることを確信してよい。しかし、人間が、故意に誘惑の力に身をさらすときに、おそかれ早かれ倒れるのである。

神がご自分の器として、特別の働きのために用いようとなさるその人々を、サタンは全力を尽くして挫折させようとする。サタンは、われわれの弱点を攻撃し、品性の欠点を通じて、人間全体を支配しようとする。そしてサタンは、こういう欠点が人の心にいだかれているかぎり、自分の成功はまちがいないことを知っている。しかし、だれでも打ち負かされる必要はない。人間は、自分の弱い力で悪の力を征服するように、放任されていない。援助は手近にある。そして、だれでも真にそれを望む者には与えられる。ヤコブが幻に見たはしごを上り下りする神の使いたちは、最高の天にまででものぼろうと志すすべての魂に助けを与えるのである。(人類のあけぼの下巻 218,219)

秘密は何か

「そこでデリラはサムソンに言った、『あなたの大力はどこにあるのか。』」(士師記 16:6)

サムソンが勝利を取めたあとで、人々は彼を士師にした。彼は、二十年の間、イスラエルを治めた。しかし、二つの悪は、さらに次の悪へと導くのであった。……彼は、彼の身を破滅に陥れる肉の快楽を求め続けた。サムソンは、その故郷からあまり遠くない「ソレクの谷にいる……女を愛した」。その女はデリラ(消費者)という名であった。……ペリシテ人は、敵の行動を絶えず見張っていた。彼が新しい女を愛して墮落したときデリラを用いて、彼を破滅させようとした。

ペリシテの各地方の代表者から成る一団が、ソレクの谷を訪れた。彼らは、サムソンが大力を持っているまま彼を捕えようとはせず、できれば彼の力の秘密がどこにあるのかを聞き出そうとした。そこで、彼らは、それを見つけ出して知らせるようにデリラを買収した。

裏切り者のデリラが、いろいろと手を尽くしてたずね出そうとしたところ、サムソンは、ある一定の方法でわたしを縛れば、わたしはほかの人のように弱くなるというて、彼女をだました。彼女が言われた通りにしてみると、うそがばれてしまった。それで、女は、サムソンがうそを言ったことを責めて言った。「あなたの心がわたしを離れているのに、どうして『おまえを愛する』と言うことができますか。……

サムソンは、ペリシテ人がサムソンの愛人と組んで、三回も自分を殺そうとしている明らかな証拠をみた。それが失敗するたびに、彼女はそれをただのたわむれのように装ったので、サムソンは愚かにも恐れを感じなかった。(人類のあけぼの下巻 214-216)

この魅惑的な女との交際で、イスラエルの士師は、民の幸福のためにきよいものとしてさげられるべきであった貴重な時間を浪費した。しかし、最も強い人を弱くさせる盲目的激情が、理性と良心を支配してしまった。……

サムソンが理性を失ったことはほとんど信じがたい。初め、彼は秘密を漏らすほど完全な虜にはなっていなかった。しかし、彼は魂を裏切り者の網に故意にかかり、その網目は一歩進むごとに、彼の周りに張り巡らされた。(SDA パイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1007)

5月8日

これが秘密

「彼は主が自分を去られたことを知らなかった。」(士師記 16:20)

デリラは、毎日彼に迫ったので、ついに「彼の魂は死ぬばかりに苦しんだ」。それでも彼は

不思議な力にひかれて、彼女のそばにいた。サムソンは、とうとうたまらなくなって、秘密を明かした。「わたしの頭にはかみそりを当てたことはありません。わたしは生れた時から神にささげられたナジルびとだからです。もし髪をそり落されたなら、わたしの力は去って弱くなり、ほかの人のようになるでしょう」。ペリシテ人の君たちのところへ、すぐに彼女のところへ来るようにという知らせがとんだ。勇士サムソンが眠っている間に、ふさふさした髪の毛が彼の頭からそり落とされた。そうして、前にも三回したのと同じように、デリラは、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」と言った。サムソンは、急に目をさまして前と同じように、力を出して敵を殺そうとした。しかし、彼の腕からは力が抜けて言うことをきかなかった。彼は、「主が自分を去られたこと」を知った。デリラは、サムソンの髪の毛をそったときに、彼を苦しめ痛みを与えて、その力をためした。ペリシテ人は、サムソンの力が完全になくなったことを十分確かめないうちは近づいてこなかったからである。こうして、彼らは、サムソンを捕えて、両眼をえぐってガザへ連れて行った。そこで、彼は獄屋のかせにつながれて重労働を課せられた。

イスラエルの士師であり、勇士であった彼が、今は、力なく、盲目になり、獄屋につながれて、最もいやしい仕事をさせられるとは、なんとという変わりようであろう。彼は、自分の聖なる任務の条件を少しずつ破っていったのである。神は、彼を長く忍耐なされた。しかし、彼が自分の秘密を明かすほどに罪の力に身をゆだねてしまったときに、主は、彼を去られたのである。彼の長い髪だけに力があったのではなくて、それは、彼が神に忠誠を尽くしているしるしであった。そして、その象徴が、肉欲をほしいままにして犠牲にされたときに、それが象徴していた祝福もまた取り去られた。(人類のあけぼの下巻 216,217)

サムソンの頭が、彼の側に落ち度がなくて剃られたのであれば彼の力はなくならなかったであろう。しかし彼のとった道は、あたかも彼が自分を嫌悪して頭から髪を切り落としたかのように、神の恩寵と権威に対する軽蔑を示していた。そのために、神は彼自身の結果を耐えるままに放っておかれた。(SDA バイブルコメント - [E・G・ホワイト・コメント] 2巻 1007)

確かな収穫

「わが子よ、悪者があなたを誘っても、それに従ってはならない。」(箴言 1:10)

サムソンは、彼の危機の時、ヨセフと同じ力の源を持っていた。彼は自由に善悪を選択できた。しかし、神の力をつかむ代わりに、彼は性質の激しい情欲が彼を完全に支配するのを許した。理性の力は歪められ、品行は墮落した。神はサムソンを責任の重い、名誉ある有能な地位に召された。しかし、彼はまず神の律法に従うことを学ぶことによって抑制を学ばなければならなかった。ヨセフは自由意志を持つ道徳的人物であった。彼の前に善と悪があった。彼は純潔で清く、節操ある道か、あるいは不道徳で墮落の道かを選択できた。彼は正しい道を選び、神に是認された。サムソンは自分で引き起こした同じ誘惑の下で、情欲に身を委ねた。自分が踏み入れた道は、恥辱と惨事と死に終わることを彼は悟った。ヨセフとは何と対照的であろう。(SDA バイブル・コメント [E・G・ホイト・コム] 2 巻 1007)

主はみ言葉の中で、主を愛し恐れることをしない人々と結合しないようにと、ご自分の民にはっきりと指示なさった。そのような伴侶たちは、当然彼らのものである愛と尊敬にめったに満足しないであろう。彼らは神を恐れる妻、あるいは夫から、神の要求を無視することを含む何らかの行為を得ようと絶えず求めるだろう。神を敬う人にとっても、彼が属する教会にとっても、世俗的な妻、あるいは友人は陣営の中のスパイのようなものである。そのような人は、キリストの僕を誘惑しようとあらゆる機会を見張って、敵の攻撃にさらすであろう。(同上)

サムソンの生涯は品性がまだ十分に発達していない、まだ社会人になっていない人々のために教訓を伝えている。わたしたちの学校や大学に入る青年は、そこで色々な考え、心を持っている人を見るであろう。もし彼らが娯楽と愚行を望むならば、もし彼らが善を避けることを求めて悪と結びつくならば、彼らの前にはその機会がある。彼らの前には罪と義があり、自分でどちらかを選ばなければならない。しかし「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」ことを彼らに覚えさせなさい。(同上)

5月10日

神は覚えられる

「サムソンは主に呼ばわって言った、「ああ、主なる神よ、どうぞ、わたしを覚えてください。」(士師記 16:28)

サムソンは、ペリシテ人の見せ物となって、苦しみとはずかしめを受け、これまでになかったほどに、自己の弱さを知った。そして、彼は、苦難によって悔い改めるに至った。髪が伸びるにつれて、彼の力も徐々にもどってきた。しかし、敵は、彼をくさりにつながれた無力な囚人であると思って、恐怖を感じなかった。

ペリシテ人は、彼らの勝利を彼らの神々に帰した。そして、勝ち誇ってイスラエルの神をあなどった。「海の守護神」魚の神、ダゴンをあがめる祭りの日が定められた。ペリシテの平原全体の町々村々から、人々や君たちが集まった。礼拝者の群れが大きな神殿に満ち、屋根のまわりの棧敷にあふれた。それは、祭りの楽しい光景であった。荘厳な犠牲をささげる式に続いて、音楽と祝宴が開かれた。それから、ダゴンの力を示す最高の戦利品として、サムソンが引き出された。彼が現われたとき、人々は歓呼の声をあげた。一般の人々も、君たちも、サムソンのみじめな姿をあざ笑い、「われわれの国を荒し」た者を倒した神をたたえた。しばらくして、サムソンは、疲れたようなふりをして、神殿をさきえているまん中の二本の柱にもたれて、休むことを許してほしいと願った。そうして、彼は、神に黙祷をささげた。「ああ、主なる神よ、どうぞ、わたしを覚えてください。ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、……ペリシテびとにあだを報いさせてください」。彼は、こう祈って、その強い腕で柱をかかえ、「わたしはペリシテびとと共に死のう」と叫び、身をかがめた。すると、屋根が落ちて、そこにいた大群衆を一度に殺してしまった。「こうしてサムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった」。

偶像とその礼拝者たちは、祭司も農民も、勇士も、つかさたちも共にダゴンの神殿の瓦礫の下に葬られてしまった。その中に、神が、神の民の救済者としてお選びになった人の大きな遺体があった。(人類のあけぼの下巻 217,218)

サムソンとペリシテ人の代わりに、今や、エホバとダゴンの争いとなった。そして、主はその全能の力と最高の権威を行使するよう促された。(SDA バイブルコメント - [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1007, 1008)

彼女は約束を守った

「わたしはその子を一生のあいだ主にささげ」ます。」(サムエル記上 1:11)

エフライムの山地のレビ人エルカナは、富と勢力を持った人で、主を愛しおそれる人であった。彼の妻ハンナは、信仰のあつい女であった。優しく、けんそんで、非常な熱心さとあつい信仰とが彼女の性質の特徴であった。

ヘブル人ならだれでも、熱心に求める祝福が、この敬神深い夫婦には与えられなかった。彼らの家庭には、子供たちの喜ばしい声がなかった。そして、家名を永続させたいという願いは、他の多くの者と同じように、第二の結婚契約を結ばせるにいたった。しかし、これは、神に対する信仰の足りなさによるものであったために、幸福をもたらさなかった。家庭に、むすこ、娘は加えられた。しかし、神の聖なる制度の喜びと美とは傷つけられ家族の平和は破られた。新しい妻のペニンナは、しつと深くて、心が狭く、高慢で横柄な態度を取った。ハンナにしてみれば、希望はくじかれ、人生は耐えられない重荷のように思われるのであった。しかし、彼女は、つぶやくことなく柔和に試練に耐えた。……

地上の友に打ち明けられない重荷を、彼女は神にゆだねた。ハンナは、神が恥を除いて、彼女にむすこという尊い賜物を賜わり、その子を神のために養育し、訓練することができるようにと熱心に願い求めた。そして、彼女は、自分の願いがかなえられるならば、その子を生まれたときから神にささげることがを厳粛に神に誓った。……

ハンナの祈りは、聞きとどけられた。彼女は、心から願い求めた賜物を受けたのである。彼女は子供を見て、サムエル（神に求めた）と名づけた。（人類のあけぼの下巻 220-222）

幼児が母親から離れるのに十分な年齢に達するとすぐに彼女は自分の厳粛な誓いを果たした。彼女は母親の愛情の限りを尽くして子供を愛した。子供の伸びていく能力を見守り、子供らしい片言に耳を傾けるにつれ、日毎に彼女の愛情はより強く彼に注がれた。彼は彼女の一人息子であり、天からの特別な贈り物であった。だが彼女は、神に聖別した宝物として彼を授かったので、与えてくださったお方に返すつもりであった。信仰が母親の心を強め、親の本能的愛情に屈することはなかった。（SDA バイブルメントリ- [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1008）

5月12日

神の所有物

「わたしもこの子を主にささげます。」(サムエル記上 1:28)

ハンナは、大祭司の教育のもとで、神の家の奉仕のための訓練を受けることができるように、幼児サムエルを残して、静かにシロからラマの家に帰った。子供の物どころがつき始めたころから、彼女は、その子に神を愛し敬うことを教え、子供自身が主のものであることを自覚するように教えた。彼女は、サムエルの回りにある見なれたあらゆるものによって、彼の心を創造主に導こうと努めた。子供と別れてからも、彼女の忠実な母としての心づかいがやんだのではなかった。サムエルは、彼女の日ごとの祈りの主題であった。彼女は、毎年、手ずから彼の仕事着を作った。そして、主人と共にシロに礼拝に上ったとき、彼女はこの愛のしるしを子供に与えたのである。小さな着物の一条一条は、サムエルが、清く気高く真実になるようにという祈りによって織られた。ハンナは、そのむすこが世的に偉大になることを求めるのではなく、彼が天の認める偉大さに達することを熱心に求めた。すなわち、それは彼が神をあがめ、同胞を祝福することであった。

ハンナには、どんな報いが与えられたことであろう。そして、彼女の模範は、忠実であることに対してなんという激励を与えていることであろう。測り知れない価値のある機会と、無限に尊い有利な立場とが、すべての母親にゆだねられている。女がたいくつな仕事と考える日常のいやしい務めは、偉大で高貴な働きとみなされなければならない。母親には、その感化力によって世界を祝福するという特権がある。そして、そうすれば、彼女自身の心にも喜びがわくのである。彼女は、照っても曇っても輝くみ国へ行く子供たちの足のために、まっすぐな道を備えるのである。しかし、それは、母親が自分自身の生活において、キリストの教えに従おうとするときにのみ、子供たちの品性を神のみかたちにかたどって形成することを望みうるのである。世の中には、腐敗的感化がみなぎっている。流行や慣習が青年たちに強く働きかけている。もしも母親が、教え、導き、制する義務を怠るならば、子供たちは、自然と悪に従い、善から離れていく。すべての母親は、たびたび救い主のみもとに行って、「どのように子供をしつけ、子供に何をしたらよいかを教えてください」と祈らなければならない。母親は神がみことばの中にお与えになった教えに心を向けるとよい。そうすれば、必要に応じて、知恵が与えられることであろう。(人類のあけぼの下巻 225,226)

子は親に似る

「わが子よ、あなたの父の戒めを守り、あなたの母の教を捨てるな。」(箴言 6:20)

子供はたいてい両親のとおりになるものであり、親のからだの状態や気性や食欲、知的、道徳的な傾向は多少にかかわらずその子供に再び現われる。

両親の目標が高潔で知的、霊的な能力が高く、体力の発育がよければ、子供に与える生命もそれだけりっぱなものである。また、親は彼らが持っている最高のものを育成することによって社会を形成し、将来の時代を進歩させる影響を及ぼすのである。

父母はその責任を理解する必要がある。社会には青年のゆくてを誤らせるわながいっぱいある。……彼らは……幸福と見える道に隠されている危険や恐ろしい結果を見抜くことができない。……

子供が悪に対する戦いにりっぱに勝てるように、生れ出る前からその準備を始めなければならない。

責任は特に母親にあるのであって、母親は生命の血液によって子供を養い、その肉体を築くばかりでなく、その子供の精神や品性を形成する知的、霊的感化を与える。……

また神から教育された子供であり、高潔なさばき人であり、イスラエルの聖なる学校の創始者であったサムエルを生んだのは、祈りと自己犠牲の人、神の靈感を受けた婦人ハンナであった。(ミナリー・オブ・ヒーリング 342,343)

すべての母親が、彼女の義務と責任がどんなに大きいかわかる、また忠実に対する報いがどれほど大きいかわかることをできたら、と思う。子供たちへの母親の日々の感化が、彼らを永遠の生命か永久の死かに備えている。家庭における母親の権限は、説教壇に立つ牧師や、あるいは王座についている王よりも、もっと決定的なものなのである。(SDA バイブルメント [E・G・ホブ・コメント] 2 巻 1008, 1009)

5月14日

危険な実例

「しかし彼らは父の言うことに耳を傾けようとしなかった。」(サムエル記上 2:25)

エリは、イスラエルの祭司であり、士師であつた。彼は、神の民の中で、最高で最も責任ある地位を占めていた。祭司の聖職に選ばれた人、また、国じゅうで最高の裁判権を持った者として、エリは、人々の模範として尊敬され、イスラエルの部族に大きな感化を及ぼしていた。ところが、彼は、人々を治める任命は受けたが、自分自身の家は治めなかった。……彼は平和と安易を愛したので、彼の権威を行使して子供たちの悪習慣と情欲を是正しなかった。彼は、子供たちと争ったり彼らを罰したりしないで、子供たちのしたいほうだいのことをやらせておいた。彼は、子供たちの教育が、彼の最も重大な責任の一つであることを自覚しないで、そのことを軽視した。イスラエルの祭司であり、裁判官である者は、神がおゆだねになった子供たちを制し、治める義務について、無知であつたわけではなかった。しかし、エリは、義務を行なうことを恐れてしなかった。なぜなら、それは、むすこたちの意志にさからい、彼らを罰し、拒むことを必要としたからであつた。……

犯罪ののろいは、彼のむすこたちの行為にあらわれた腐敗と悪に明らかに見られた。彼らは、神の品性も神の律法の神聖さも正しく理解しなかった。彼らにとって、神に仕えることは、普通のことであつた。彼らは、子供のときから聖所とその務めになれていた。しかし、彼らは、もっと敬神深くなるかわりに、その神聖さと意義とを、まったく見失ってしまった。父親は、子供たちが、自分の権威を敬わないことを是正せず、厳粛な聖所の務めを尊ばないのを抑制しなかった。それで、彼らが成人したときに、彼らは、懷疑と反逆の恐ろしい実に満ちていた。……

青年たちに、好きかってなことをさせておくことほど家庭にとって大きなのろいはない。親が、子供たちの欲することをみな許し、彼らのためでないを知っていることをしたいままにさせておくとき、まもなく子供たちは親に対する尊敬を全く失い、神または人の権威も全然認めなくなり、サタンの意のままに捕虜になってしまう。(人類のあけぼの下巻 230, 235)

抑制がない

「わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかったからである。」
(サムエル記上 3:13)

エリは善良で道徳的に純潔な人であったがあまりにも手ぬるい人であった。彼は自分の品性における弱点を克服しなかったので、神のご不興をこうむった。彼は誰の感情も傷つけたくはなく、罪を譴責したり、とがめる道徳的勇気を持ち合わせていなかった。……

エリは純潔と正義を愛したが、悪を抑えるための十分な道徳力がなかった。彼は平和と調和を愛し、不純と犯罪に対してますます無感覚になった。……

エリは寛大で愛情に満ち、親切であって、神への奉仕と神のみ業の繁栄に真の関心を持っていた。彼は祈りに力ある人であり、神のみ言葉に反抗して立つことは決してなかった。しかし彼には欠けているところがあった。イスラエルを純潔に保つために、神が彼に信頼することができるように、罪を譴責し、罪びとに対して処罰を実行するという品性の堅固さが彼にはなかった。彼は正しい時と場所で「だめ」という勇気と力を自分の信仰に加えなかった・(教会への証 4 巻 516,517)

エリは神のみ旨をよく知っていた。神がどんな品性をお受け入れになるか、またどんな品性をお嫌いになるか知っていた。にもかかわらず、彼は自分の息子たちが、度を越えた欲情と歪められた食欲、腐敗した道徳を助長しながら育つままに放っておいた。

エリは神の律法を子供たちに教え、自らの生活において彼らに良い手本を与えたが、彼の義務はこれだけではなかった。父親として、また祭司として、彼らに自らの歪んだ意志に従うことを抑制させるように、神は求められた。彼はこの事をし損じたのであった。(SDA バイブルメント [E・G・ホイト・コメント] 2 巻 1009)

悪を譴責する勇気に乏しく、怠慢または関心が欠けているために、家族または神の教会を清める努力を熱心に行ないない者は、その義務の怠慢の結果生じた悪の責任を問われる。親として、または牧師としての権威によって、とどめることができた人の悪は、あたかもそれが自分の行為であるかのように責任を問われる。
(人類のあけぼの下巻 234)

5月16日

延ばされた刑罰

「その日には、わたしが、かつてエリの家について話したことを、はじめから終りまでことごとく、エリに行うであろう。」(サムエル記上 3:12)

エリは、自分のむすこたちを聖職につかせて、大きな過失を犯した。エリは、あれやこれやにかこつけて、彼らの行動を黙認し、彼らの罪に盲目になっていた。しかし、ついに、エリは、彼のむすこらの罪に目をそむけていることができなくなってしまった。人々が、彼らの非行を非難し、大祭司は、悲しみと悩みに沈んだ。彼はもう黙ってはおれなくなった。しかし、彼のむすこたちは、自分のこと以外は、だれのことも考えないように育てられていた。それで、彼らは、人のことは何もかまわなかった。彼らは、父親の悲しみを見たが、その堅い心は動かなかった。彼らは、父の穏やかな勧告を聞いたが感銘を受けなかった。その罪の結果の警告を聞いたけれども、その悪行を改めようとしなかった。もし、エリが、その悪いむすこたちを正当にあつかっていたならば、彼らは、祭司職から退けられて、死に処せられていたことであろう。(人類のあけぼの下巻 232,233)

主は、何年も刑罰をくだすことを延ばされた。その間に、過去の失敗を償う多くのことができたのであったが、年をとった祭司は、主の聖所を汚し、イスラエルの幾千という魂を滅びに陥れていた悪を正すために、効果的な手段を取らなかった。神の忍耐は、ホフニとピネハスの心を堅くし、さらに大胆に罪を犯させた。エリは、自分の家に与えられた警告と譴責の言葉を、全国に知らせた。彼は、こうした方法で、彼の過去の怠慢の悪影響をいくらかでも取り消そうと望んだ。(同上 241)

神は罪と犯罪を放置しておく怠慢と、クリスチャンであると公言する家族の内にある有害なものを発見するのが遅い無神経をとがめられる。子孫の過失や愚行の程度に応じて両親の責任を問われる。神はエリの息子ばかりではなく、エリ自身にも災いを下された。そしてこの恐るべき例は現代の両親への警告でなければならない。(教会への証 4 巻 200)

意気地のない父親

「エリの家が悪は、犠牲や供え物をもってしても、永久にあがなわれないであろう。」(サムエル記上 3:14)

エリは、家族の管理に関する神の規則に従って、彼の家を治めなかった。彼は、自分の判断に従った。……今も、それと同じようなまちがいを犯している者が多い。彼らは、神がみことばのなかにお与えになった方法よりも、さらにすぐれた子供の教育法を知っていると思っている。彼らは、子供たちに悪い癖をつける。そして、「彼らは、まだ小さくて、罰することはできない。大きくなるまで待つて、よく言いかせよう」と申しわけをする。こうして、悪癖は助長されて、第二の天性になってしまう。子供たちは、抑制を受けず、彼らの生涯を通じてののろいとなり、また他の人にも伝染する可能性のある品性の傾向をもって成長する。(人類のあけぼの下巻 235)

アブラハムの忠実さについての称賛の言葉と対照的に、エリについて述べられた言葉は、息子たちが大きな罪を犯していた間、彼らに務めをさせ続けていた人としてエリのことを記録している。ここにすべての両親のための教訓がある。……エリは悪を抑制せず、寛大に取り扱った。その結果は、今後永久に、犠牲によっても供え物によってもあがなうことのできない罪となった。(手紙 144, 1906 年)

ある者たちが過度に厳しすぎる一方で、エリはもう一方の極端に走った。……彼らの欠点は幼児期に見過ごされ、青年期には多めに見られた。両親の命令は無視され、父親は服従を強いなかった。

子供たちは、自分たちは手綱を取ることができると知って、その機会を利用した。息子たちの年齢が進むにつれ、彼らは意気地のない父親に対してあらゆる尊敬を失った。彼らは思いのままに罪を継続した。父親(エリ)は子供たちをいさめたが、彼の言葉は無視された。主ご自身がその律法の違反に裁きを下されるまで、日々彼らは、目に余る罪と不快な犯罪を行った。

エリの息子たちの罪は、いけにえや供え物によっても永久に償われないことを、主ご自身が決定された。厳粛な責任が負わされていたのに、聖であり、義であられる神のあわれみから見放された者たちの墮落は、どれほど大きくどれほど嘆かわしいことであろうか。(SDA バイブルメンタリー [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1009, 1010)

5月18日

世代の格差はない

「わらべサムエルは、エリの前で、主に仕えていた。」(サムエル記上 3:1)

サムエルは、幕屋の働きをするために連れてこられたときは、幼かったけれども、そのときでさえ、彼の力量に応じた任務を負わせられて、神のご用を果たした。初め、このような仕事は、非常にいやしいことで、必ずしも快いものではなかった。しかし、彼は、最善を尽くして、喜んでその務めを果たした。……

日常の小さな義務をくりかえして行なうことは、主が子供たちのために指示された道であり、それは、彼らが忠実に力ある奉仕をするための訓練を受ける学校であることを、子供たちに教えるならば、彼らの仕事は、どんなに楽しく尊いものとなることであろう。すべての義務を主のためにするように行なうことは、どんなにいやしい仕事をも魅力あるものにし、地上の働き人を、天で神のみこころを行なう天使たちと結合させるのである。(人類のあけぼの下巻 228, 229)

幼年期以来、サムエルの人生は、敬虔と献身の生涯であった。彼は少年のころ、エリの管理に委ねられ、彼の愛くるしい性格は老いた祭司の暖かい愛情を引き出した。彼は親切で寛大、勤勉で従順、そして礼儀正しかった。少年サムエルの歩みと祭司の息子たちのそれとの対比は、大変目につくもので、エリは自分に委ねられた者の存在に、安らぎと慰めと祝福を見出した。国家の最高行政官エリと純真な子供との間に、大変暖かな友情が存在したのは、類いまれなことであった。サムエルは有用で愛情深く、エリがこの少年を愛した以上に、我が子を愛した父親はいない。老齢による衰えが進むにつれて、エリは一層、息子たちの向こう見ずで不品行なやり方に激しい落胆を覚え、慰めと心の支えを求めてサムエルに愛情を傾けるようになった。

若者が助言と知恵を与えてくれる老人を尊敬し、老人は若者の助けと同情を頼みにする、といった相互依存の若者と老人を見るのは、何と感動的であろう。これがあるべき姿である。若者たちが、墓場に近づきつつある老人たちと愛情の絆で結ばれるために、彼らが年老いた者との友情に喜びを見出せるような品性の資格を持たせたいと、神はお望みになる。(SDA パイブルコメント [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1021)

リバイバル

「われわれは主に対して罪を犯した……われわれのため、われわれの神、主に叫ぶことを、やめないでください。」(サムエル記上 7:6,8)

サムエルは、全国の町々村々を巡回して、人々の心を彼らの先祖の神に向けようと努め

た。そして、彼の努力は、よい結果をもたらした。二十年間も敵の圧迫に苦しんだあとで、イスラエルの人々は「主を慕って嘆いた」のである。サムエルは彼らに勧告した。「もし、あなたがたが一心に主に立ち返るのであれば、ほかの神々とアシタロテを、あなたがたのうちから捨て去り、心を主に向け、主のみ仕えなければならない」。イエスが、地上におられたときにお教えになったのと同じ実際の敬虔と心の宗教が、サムエルの時代に教えられたことをここに見るのである。古代のイスラエルにとって、キリストの恵みがないならば、宗教の外的形式は無価値なものであった。それは、現代のイスラエルにとっても同じである。

古代イスラエルが経験したのと同じ真の心の宗教のリバイバルが、今日必要である。神に帰ろうとする者のとるべき第一歩は、悔い改めである。だれも人に代わって、悔い改めることはできない。われわれ個人個人が、神の前にへりくだり、偶像を捨てなければならない。われわれのなし得るすべてを尽くしたときに、主は、彼の救いをあらわされる。……

大群衆がミヅパに集まった。ここで彼らは、厳粛な断食を行なった。人々は、心を低くして罪を告白した。そして彼らは、教えられた命令に従う決意の証拠として、サムエルに士師の権を授けた。……

サムエルが、小羊を犠牲にささげようとしていたとき、ペリシテ人は、戦いをいどんで近づいてきた。……攻撃軍の上に恐ろしい暴風が起こった。そして、強力な戦士たちの死体が地上に乱れ散った。

イスラエルの人々は、希望と恐怖に震えて、黙って恐れながら立っていた。彼らは敵が殺されたのを見たときに、神が彼らの悔い改めをお受け入れになったことを知った。……国家であろうと、個人であろうと、神に服従する道は、安全と幸福の道であるが、罪の道は、ただ不幸と敗北に至らせるだけである。(人類のあけぼの下巻 250-252)

5月20日

周りと同じように

「いいえ、われわれを治める王がなければならない。われわれも他の国々のようになり」(サムエル記上 8:19, 20)

ヘブルの人々は、自分たちの周囲の国々のような王をサムエルに要求した。神ご自身による知恵ある穏やかな統治よりも専制的な独裁的統治者を好むことにより、また神の預言者の権限の範囲にいながら彼らは神への信仰の欠如と、自分たちを導き統治するために支配者を起こす神のみ摂理に対する信頼に欠けていることを示した。イスラエルの子らは神の特殊な民であるので、当地の形態も周囲のすべての国々とは本質的に異なっていた。神は民に規則と律法を与え、彼らのために支配者を選び、民はこれらの指導者に、主にあって従わなければならなかった。困難や大きな困惑がある場合はすべて、神に向かうべきであった。王を求める要求は、自分たちの特別の指導者である神に反抗して背反することであった。神は、ご自分の選ばれた民にとって王が最善のものではないことを知っておられた。……もし心が高ぶり、神に正しくない者が王になれば、その王は民を神から引き離し、神に反抗させるであろう。主は、だれも王の立場を占めて、ほめそやされずに、王に通常与えられる名誉を受けることはできないことを知っておられた。そして彼らが神に対して罪を犯しているその瞬間にも自分たちの方法が自分の目には正しく思えることも知っておられた。(霊的賜物 4 巻 65,66)

神は、イスラエルの人々を、他のすべての国民から分離して、神ご自身の特別の宝とされたのであった。しかし、彼らは、この大きな栄誉を無視して、異教徒の風習を模倣することを切望した。そして、世俗の風習に従おうとする切望は、今なお神の民と自称する人々の間にもあるのである。彼らが主から離れると、世の利益と栄誉を熱望するようになる。クリスチャンは、この世の神の礼拝者の風習を常に模倣しようと努めている。世の人々と一致し、彼らの風習に従うことによって、神を信じない人々に強力な感化を及ぼすことができると力説する人々が多くいる。しかし、そうする者はみな、そのために、彼らの力の根源である神から離れる。世の友となれば、神の敵である。(人類のあけぼの下巻 270)

謝罪の必要がない

「サムエルは彼らに言った、『あなたがたが、わたしの手のうちに、なんの不正をも見いださないことを、主はあなたがたにあかしされる。その油そそがれた者も、きょうそれをあかしする。』」(サムエル記上 12:5)

世的な権力と誇示への飽くことのない渴望は、サムエルの時代と同様に、今日も治す事は困難である。クリスチャンたちは、世俗の人たちのように建て、衣服を身につけ、この世の神だけを拝む者たちの習慣と習わしを真似ることを求める。神の言葉の指示、神の僕らの勧告と叱責、また神の御座から直接送られた警告でさえ、このくだらない野心を抑制する力がないように思える。心が神から遠ざかるとき、ほとんどどのような口実でも、神の権威を無視することを正当化するのに十分である……

たいていの有用な人々は、めったに真価を認められない。同胞のために極めて精力的に無私の働きをなし、また最高の成果を上げるのに貢献した人たちが、しばしば忘恩や無視といった報いを受ける。このような人たちは、自分が無視され、その勧告が軽んじられて軽蔑されるのを見るとき、自分は大きな不正を被っていると思うかもしれない。

しかし彼らに、神のみ霊が確かに促さない限りは、自分自身を正当化したり、弁護すべきでないことを、サムエルの模範から学ばせなさい。……

働きを終える彼に与えられた栄誉は、義務の遂行に取りかかったばかりの人や、尚も試みられねばならない人が受ける喝采と祝いの言葉よりも、はるかに価値がある。……

裁判官のような責任ある地位を引退する人で、自らの清廉潔白さについて、次のように言うことができる人がどれだけいるだろうか。「あなたがたの内の誰が、私に罪を悟らせるだろうか。わいろを受け取るために、私が正義からそれてしまったことを、誰が証明できるだろうか。審判と正義を行う者として、私は自分の記録を汚したことはない」と。イスラエルの民が王を立てることに決めた故に、サムエルが彼らに別れを告げるときに述べたようなことを、今日誰が言い得るだろうか。……勇敢で高潔な士師!しかし、厳格なほどに清廉潔白な人物が、自己弁護をするために自らを低くしなければならぬというのは悲しいことである。(SDAパイブルモニター [E・G・ホフ・コメント] 2巻 1013, 1014)

5月22日

民の選び

「あなたがたの選んだ王、あなたがたが求めた王を見なさい。」(サムエル記上 12:13)

神は、人々が望んだ通りの王サウルをイスラエルにお与えになった。彼は眉目秀麗で背が高く、風采がりっぱであったので、彼の外観は、人々の王に対する期待にかなっていた。そして、彼の勇気と軍隊を指揮する能力とは、他国の尊敬と誉れとを得るために何よりもたいせつなものであると彼らが考えた特質であった。彼らは、王が正義と公平とをもって、国を治めるためには、不可欠のより高尚な特質を持っているかどうかは少しも考えなかった。彼らは真に品性の気高い人、神を愛しおそれる人を求めなかった。彼らは、神の特選の民としての独特の清い生活を保つために、支配者が持つべき特質について、神の勧告を仰がなかった。彼らは、神の望まれることなく、自分たちのしたいことをしようとしていた。であるから、神は、彼らが求めたような王を彼らに与え、彼らと同じ品性の持ち主をお与えになった。彼らの心は、神に従っていなかった。そして、彼らの王もまた、神の恵みに従っていなかった。彼らは、この王の支配下であって、自分たちの誤りを認め、神に忠誠を尽くすようになるために必要な経験を得るのであった。

しかし、主は、サウルに王国の責任を負わせられたので、彼をそのまま放任なさらなかった。神は、サウルに聖霊を与えて、彼の弱さと神の恵みの必要をあらわされた。だから、サウルが神に信頼したならば、神は、彼と共におられるのであった。彼の意志が神のみこころに支配されているかぎり、そして、彼が霊の訓練に服するかぎり、神は、サウルの努力を成功させられるのであった。しかし、サウルは、神を度外視して行動したときに、主は彼を指導することができなくなり、彼を捨てられたのである。そのとき、「主は自分の心にかなう人」を王位に召された。彼は、品性の欠点がなかったわけではなかった。しかし、彼は自己にたよる代わりに神にたより、神の霊に導かれるのであった。彼は、罪を犯したときには、譴責とこらしめに従うのであった。(人類のあけぼの下巻 308, 309)

可能性がそこにある

「イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はなく」(サムエル記上 9:2)

将来の王の人間的特質は、王を求めた人々の誇りを満足させるものでなければならなかった。……背が高く、りっぱで気高い威厳を備えた壮年期の彼は、生まれながらの指導者のように思われた。サウルは、これらの外面的魅力はあったが、真の知恵を構成するのに必要な気高い特質に欠けていた。彼は、青年時代に、その性急な激情を支配することを学ばなかった。彼は、神の恵みの改変の力を感じたことがなかった。(人類のあけぼの下巻 272)

主は、神の教えを与えないままで、サウルを責任のある地位に放って置かれることはなかった。新しい召命を持つべきであった彼に、主のみ霊が下った。その結果、彼は新しい人に変えられた。主はサウルに新しい心と、彼が以前に持っていたのとは異なる思考と目的と希望をお与えになった。彼を有利な立場に置いた神の霊的知識に伴うこの啓発は、彼の意志をエホバの御旨に結合させるはずだった。……

もしサウルの能力が神の支配に従っていれば、彼は王国を治めることのできる精神と影響力を持っていたが、サタンの力に屈服し、悪のための広範囲にわたる影響力を及ぼすことになった。善を行うために与えられていた生まれつきの才能そのものが、サタンに利用されたのだった。彼は、神から与えられている優れた知性と精神の故に、他の人たちよりも、もっと過酷で執念深く、有害になり、自らの聖くないもくろみをやり遂げようと決意することになった。(SDA バイブルモニター [E・G・ワット・コメント] 2 巻 1013)

サウルが自分自身の力と判断に頼るならば、彼は衝動的に行動し、重大な過ちを犯したであろう。けれども、もし彼が謙遜なままで、絶えず神の知恵に導かれることを求めて、神の摂理が道を開くにつれて前進するならば、彼は自らの高い地位の義務を、成功と名誉をもって果たすことができたであろう。神の恵みの影響下で、あらゆる良い特質が力を得る一方、悪い特性は同じくらい着実に力を失ったであろう。これは、主に己を捧げるすべての人のために、主がしてあげようと言われる御業である。(同上 1016, 1017)

5月24日

神の前に走る

「サウルは、サムエルが定めたように、七日のあいだ待ったが、サムエルがギルガルにこなかったので、民は彼を離れて散って行った。」(サムエル記上 13:8)

サウル王の治世の第二年めになって、初めて、ペリシテ人を征服しようとする動きが起こった。王子ヨナタンが、まず攻撃を開始し、ゲバにある彼らの要塞を攻撃して打ち破った。この敗北に激怒したペリシテ人は、すぐにイスラエルを急襲する準備を開始した。ここで、サウルは……全国に戦いの布告を伝えた。
……

預言者によって定められた期間が完了する前に、彼は遅延にしぶれを切らし、周囲の困難な状況に失望してしまった。……

サウルを試みる時が来た。ここで、彼は、神に信頼するかどうか、また神の命令に従って忍耐して待つかどうかを明らかにしなければならなかった。こうして、彼は、困難に直面した場合、神の民の指導者として、神の信頼を受けるに足る人物であることを示すか、それとも、動揺して、彼にゆだねられた聖なる責任を負う価値がないかを示すことになった。(人類のあけぼの下巻 285, 286)

サムエルを手間取らせて、サウルの心が暴露されることが、神の目的であった。緊急時に彼がどうするかを、他の人たちが知るためであった。苦しい立場に置かれることになったが、サウルは命令に従わなかった。誰がどのような方法で神に近づこうが全然違いはないだろうと彼は感じ、勝手にやる気満々になって、神聖な儀式に自ら乗り出した。

主は、自らお定めになった代理者を持っておられる。神の働きに関係する者たちが、もしこれらの代理者を認めず、尊敬せず、人々が自由に神の要求を無視すると感じるようであれば、そういう者たちは責任ある地位についているべきではない。定められた代理者を通じての勧告や神の命令に、彼らは耳を傾けようとし、自分たちはサウルのように、自分たちに全く任じられていない働きを軽率に行おうとし、自分たちの人間的判断に従って犯した過ちは、神のイスラエルを、全能の指導者が彼らにご自身を表すことが出来ないところに置くのであった。(SDA バイブルコメント [E・G・ホワイト・コメント] 2 巻 1014)

足りないことが判明

「その燔祭をささげ終ると、サムエルがきた。サウルはあいさつをしようと、彼を迎えに出た。」(サムエル記上 13:10)

神は、その務めのために聖別されたものだけが、神の前でささげ物をささげなければならないという指示を与えておられた。しかし、サウルは、「燔祭……をわたしの所に持ってきなさい」と命じた。彼はよろいを着て、武器を持ったまま祭壇に近づいて、神の前に犠牲をささげた。……もしサウルが、神からの援助を受ける条件に従っていたならば、主は、王に忠誠を尽くした少数の者を用いて、イスラエルのために驚くべき救いをもたらされたことであろう。しかし、サウルは自分と自分の業績に満足し、譴責ではなく賞賛に値するもののように、預言者を出迎えた。(人類のあけぼの下巻 287)

サウルは自らのやり方を弁護しようと努めて、自己を厳しく非難する代わりに預言者をとがめた。今日にたような道をたどる者が多い。彼らはサウルのように自分の誤りについて盲目である。主が彼らを正そうとなさるときに、彼らは叱責を侮辱と受け止め、神の使命をもたらす人のあら探しをする。

サウルが自らの誤りを喜んで認め、告白していれば、この苦い経験が将来のための防御となったことだろう。その後彼は、神の非難を招いた過ちを避けたことだろう。しかし、自分は不正に非難されたと感じつつ、当然のごとく、再度同じ罪を犯すことになるのであった。

主はその民に、あらゆる状況下で、絶対的信頼を表すことを希望なさる。我々はいつも摂理の働きを理解できるとは限らないが、主が我々に光を注がれることをよしとなさるまで、忍耐と謙遜をもって待つべきである。

サウルの罪は、彼が神聖な責任を担うのにふさわしくないことを証明した。……彼が神の試みに耐えていれば、王冠は彼と彼の家に定着したことだろう。事実サムエルは、まさにこの目的のためにギルガルに来ていた。しかしサウルははかりで量られて、量の足りないことが判明した。彼は、神の栄誉と権威を厳粛に見なす人物に地位を譲るために解任されなければならなかった。(SDA バイブルコメント [E・G・ホイト・コメント] 2 巻 1014, 1015)

5月26日

勇気を出す時

「ヨナタンはその武器を執る若者に言った、『さあ、われわれは、この割礼なき子ども達の先陣へ渡って行こう。主がわれわれのために何か行われるであろう。多くの人をもって救うのも、少ない人をもって救うのも、主にとっては、なんの妨げもないからである。』」(サムエル記上 14:6)

主は、サウルが、僭越にもささげ物をささげて罪を犯したために、ペリシテ人を滅ぼす栄誉を彼にお与えにならなかった。主をおそれた王子のヨナタンが、イスラエルを救う器に選ばれた。彼は神からの感動を受けて、武器をとる若者に向かって、敵の陣地にひそかに乗り込もうと言った。……

他の者に反対されるのを避けるために、ふたりでひそかに陣地を抜け出た。彼らは、先祖たちを導かれた神に熱心な祈りをささげてから、その後の行動に移る場合の合図をきめた。……やがて彼らは、ペリシテ人の陣地に近づいて、敵前に姿を現わした。すると、ペリシテ人は彼らをあざけて、「見よ、ヘブルびとが、隠れていた穴から出てくる」と言った。彼らは、「われわれのところに上ってこい。目に、もの見せてくれよう」といどみかけ、接近してきたこのふたりのイスラエル人に罰を与えようと考えた。この挑戦は、主が彼らの企てを成功させてくださる証拠として、ヨナタンと武器をとる若者とが定めておいた合図であった。勇者たちは、ペリシテ人の前から姿を消して、けわしい隠れた通路を選び、接近するのが不可能と思われていただんがいの頂上に進んで行った。そこは、強固な防備がほどこされていなかった。こうして、彼らは、敵の陣地に侵入して、守備兵を殺した。敵は不意を打たれて、あわてふためき、なんの抵抗もしなかった。

天使たちが、ヨナタンと武器をとる若者を守護し、彼らと共に戦ったので、ペリシテ人は、彼らの前に敗れ去った。(人類のあけぼの下巻 290-292)

この二人は、自分たちが人間の司令官以上の方の感化と命令の下に行動していたという証拠を示した。外面的には、彼らの冒険は無分別であり、軍のあらゆる規則に反していたが、ヨナタンの行動は人間的な無分別ではなかった。彼は自分と武器をとる若者ができることに頼ったのではなく、神がご自分の民イスラエルのために用いられた器であった。(神の息子、娘たち 7月 20 日)

真の王

『『夕方まで、わたしが敵にあだを返すまで、食物を食べる者は、のろわれる。』』
(サムエル記上 14:24)

王が断食の命令を出したことは、利己的野心からであって、自己を賞揚するためには、民の必要などには無関心であることを明らかにした。その禁令を誓ってまでも厳守させたことは、サウル王が向こう見ずで、神を敬わない人間であることをあらわした。のろいの言葉自体も、サウルのこの熱心さが、神の栄光のためではなくて、自己のためであることを証明している。彼の目的は、「主が敵にあだを返される」ことではなくて、「わたしが敵にあだを返す」ことであると彼は言った。……

王が、禁令を出したことを知らなかったヨナタンは、昼間、戦っていたときに通った森の中ではち蜜を少し食べて、禁令を知らずに犯した。夕方になって、サウルはこのことを聞いた。禁令の違反者は、死に処せられると彼は言っていた。ヨナタンは故意にそむいたのではなかった。また、彼の生命は奇跡的に保護され、彼によって救済がもたらされたにもかかわらず、王は、刑の執行を命令した。サウルが王子の命を救うことは、このような向こう見ずの誓いをさせた自分が、罪を犯していたことを自認することになるのであった。それでは、彼の誇りが傷つけられるのであった。「神がわたしをいくえにも罰してくださるように。ヨナタンよ、あなたは必ず死ななければならない」と、彼は恐ろしい宣告を下した。……

サウルは、この少し前に、ギルガルにおいて、差し出がましくも、神の命令に反して祭司の務めを行なったのであった。彼は、サムエルの譴責を受けると、頑強に自分を正当化した。ところが、彼の命令の違反者があれば、その命令が不合理で、しかも、知らずに犯したものであっても、王であり父であるサウルは、王子の死を宣告したのである。

人々は、その宣告の執行を拒否した。彼らは、王の怒りを恐れずに言った。「イスラエルのうちにこの大いなる勝利をもたらしたヨナタンが死ななければならないのですか。決してそうではありません。主は生きておられます。ヨナタンの髪の毛一すじも地に落してはなりません。彼は神と共にきょう働いたのです」。高慢な王は、この満場一致の裁決を無視することはできなかった。そして、ヨナタンは救われた。(人類のあけぼの下巻 292-294)

5月28日

両方に働く

「あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。」(マタイ 7:2)

サウルは、王子が自分以上に神からも人々からも愛されていることを感じないわけにいなかった。ヨナタンが救われたことは、王の無分別に対するきびしい譴責であった。彼は、自分ののろいが自分の頭にかえってくるのを感じた。彼は、ペリシテ人との戦いを長く続けないで、ゆううつと不満のうちに家に帰った。

すぐに自分の罪の言い訳をしたり、弁解をしたりする人は、他人をきびしくさばき非難する人でもある。多くの者は、サウルのように、神の不興を招くのであるが、勧告を拒み、譴責を軽べつする。主が彼らと共におられないことが明らかになっても、悩みの原因が、自分たち自身にあったことを認めようとしない。彼らは、高慢で自負心をいだいている。その反面、彼らは、彼らよりも善良な他の人々を残酷にさばき、きびしく譴責する。……

自己を高めようとする者は、その本性を暴露する立場に置かれることがよくある。サウルの場合もその通りであった。人々は、王が、正義、あわれみ、愛よりも、王の栄誉と権威を重んじたことを、彼自身の行動によってはっきりと知ることができた。こうして、人々は、神がお与えになった統治を拒否したことが誤りであったことを悟らされた。彼らは、彼らのために祝福を祈り求めた敬神深い預言者の代わりに、盲目的熱心さをもって祈り彼らにのろいを下す王を選んだのであった。

もし、イスラエルの人々が、ヨナタンを救うために介入しなかったならば、彼らの救済者は、王の命令によって殺されてしまったことであろう。その後、人々はどんな不安感をいだいて、王に従ったことであろう。人々は、彼ら自身がサウルを王位につけたことを、どんなに悲しんだことであろう。主は、人々の頑強さを長く忍ばれる。そして、すべての者に、罪を認めて悔い改める機会をお与えになる。神のみこころを無視し、神の警告を軽べつする者は、栄えるように見えても、神がお定めになった時が来れば、必ずその愚かさをあらわすのである。(人類のあけぼの下巻 294, 295)

再び試みられる

『『今、行ってアマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼしつくせ。彼らをゆるすな。男も女も、幼な子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだも、ろばも皆、殺せ』』。
(サムエル記上 15:3)

主は、彼のしもべをつかわして、サウルにもう一つの使命をお与えになった。サウルは、服従することによって、神に対する忠誠とイスラエルを指導する彼の資格とをまだ証明することができた。サムエルは、王のところに来て、主の言葉を伝えた。……

アマレク人は、荒野でイスラエルに戦いをいどんだ最初の民族であった。この罪と彼らの神への反抗と彼らの墮落した偶像礼拝のゆえに、主は、モーセによって彼らに宣告を下された。……この宣告は、四百年の間執行が延ばされていた。しかし、アマレク人は、彼らの罪を離れなかった。この邪悪な民族は、もしできることなら、神の民と神の礼拝とを地上からぬぐい去ろうとしていたことを主は知っておられた。今、長く延期されていた宣告の執行の時が来ていた。

神が悪人を長く忍ばれるために、人々は大胆に罪を犯す。しかし、長く延期されても、刑罰の確実なことで恐ろしさにはなんの変わりもない。……

神は刑罰を喜ばれないが、神の律法を犯す者には刑罰を与えられる。地の住民が全く腐敗して滅亡することを防ぐために、神はやむをえずこれをなさらなければならぬ。神は、いくらかの人々を救うために、罪にかたくなになった人々を滅ぼさなければならない。……主が刑罰の執行を延ばしておられること自体が、神の刑罰を招いた罪の恐ろしさと、罪人に臨もうとする報復のきびしさを証明している。

神は、刑罰を与えながらも、あわれみを忘れられない。アマレク人は、滅ぼされなければならなかったが、彼らの中に住んでいたケニ人は救われた。この人々は、偶像礼拝から全く離れてはいなかったが、真の神の礼拝者で、イスラエルの友であった。モーセの義理の兄弟ホバブは、この種族の出身で、荒野のことをよく知っていたので、イスラエル人の荒野の旅に同行してよい助言を与えた。(人類のあけぼの下巻 296-298)

5月30日

信頼されるに足りない

「しかしサウルと民はアガグをゆるし、また羊と牛の最も良いもの、肥えたものならびに小羊と、すべての良いものを残し、それらを滅ぼし尽すことを好まず、ただ値うちのない、つまらない物を滅ぼし尽した。」(サムエル記上 15:9)

サウルは、ミクマシで、ペリシテ人を滅ぼしてから、モアブ、アンモン、エドム、アマレク、ペリシテなどの国々と戦った。そして、彼の行くところ連戦連勝であった。彼は、アマレク人を撃滅する任命を受けるやいなやすぐに宣戦を布告した。彼自身の権力に預言者の権力も加えられた。そして、イスラエルの人々は、召集に応じて彼の旗のもとに集まった。この遠征は、自己誇張のために行なわれるものではなかった。イスラエルの人々は勝利の栄誉も敵のぶんどり物をも受けてはならなかった。彼らは、ただ、アマレク人に対する神の刑罰の執行のために、神に対する服従の行為として戦いに従事するだけであった。神は、すべての国々が、神の主権に逆らった国民の運命を見、彼らが軽べつしたその国自身に滅ぼされることを注目するように計画された。……

アマレク人に対するこの勝利は、サウルのこれまでの勝利中の最大のものであった。そして、これは、彼にとって最も危険な誇りをふたたび燃え上がらせた。神の敵を全滅させよという神の命令は、部分的にしか行なわれなかった。サウルは、王を捕虜にして連れて帰り、凱旋の栄光を盛り上げるために、周囲の国々の習慣をまね、勇猛果敢なアマレクの王アガグを生かしておいた。人々は、羊と牛と家畜の最もよいものを残しておき、それらを主に犠牲としてささげるために保留したと彼らの罪の弁解をした。しかし、彼らは、自分たちの家畜の代わりに、これらをささげようとしていたに過ぎなかった。

サウルは、ここで、最後の試練に当面したのであった。彼は、神のみこころをあえて無視し、独立した王として国を治めようと決意したことを示したので、主の代表者として王権を委託されることができないことになった。(人類のあけぼの下巻 298, 299)

羊の声を聞く

『わたしはサウルを王としたことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行わなかったからである』。サムエルは怒って、夜通し、主に呼ばわった。』(サムエル記上 15:11)

サウルと彼の軍勢が、勝ち誇って帰途についたとき、預言者サムエルの家では大きな苦悩があった。彼は、王の行動を非難した主からの言葉を聞いたのであった。……

神の悔いとは、人間の悔いのようなものではない。「イスラエルの栄光は偽ることもなく、悔いることもない。彼は人ではないから悔いることはない」。人間の悔いは心の変化を言うのである。神の悔いは環境と関係の変化を意味する。人間は、神の恵みにあずかることのできる条件に応じることによって、彼の神との関係を変えることができる。それとも、自己の行為によって、恵まれた状態の圏外に自分を置くこともできる。

しかし、主は、「きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」(ヘブル 13:8)。サウルの不服従は、彼の神との関係を変えた。しかし、彼が神に受け入れられる条件に変わりはなかった。神の要求は、なお、同じであった。神には、「変化とか回転の影とかいうものはない」のである。

翌朝、預言者は、悲痛な思いをいだいて、誤った王に会うために出かけた。サムエルは、サウルが自分の罪を認め、悔い改めて心を低くして、神の恵みにふたたびあずかるようになることを希望していた。しかし、罪の道に一步踏み込めばその先はやさしい。不服従によって心がゆがんだサウルは、サムエルに会いに来て偽りを言った。彼は、「どうぞ、主があなたを祝福されますように。わたしは主の言葉を実行しました」と叫んだ。預言者の耳に聞こえた音は、不服従な王の言葉が偽りであることを証明した。(人類のあけぼの下巻 299, 300)

サウルは雄牛と羊の鳴き声が自分の犯した罪を明らかにしている間でさえ、自分の罪を否定した。(手紙 12a、1893 年)

研究 4

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



「守る」

栄光を帰するためには、光になる必要があります。光になるためには、聖霊によってみ言葉を理解する必要があります。なぜなら、理解するとは、見ることだからです。英語では、理解したときに、“I see.”と言います。

「主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする」(詩篇 19:8)。

「まじりない」とは、食べるべき穀物にもみがらが混じっていないということですから。食べるべき食物は神のみ言葉であり、もみがらとは人の言葉です。まじりないみ言葉を聞くことのききんが迫っています。

光を見ることを、enlightenと言います。En-ligh(光)-enです。光を与えること、すなわち、見えるようにすることです。光は、神に帰するとき栄光となり、これを人が理解するときに、その人の品性となります。これは、ちょうどモーセが「あなたの栄光を見せて下さい」と嘆願したとおりです。彼が神のご品性を見せていただいたときに、彼の品性となったのです。

「キリストの品性(栄光)が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」(キリストの実物教訓 47)。

人として来られたイエスのご品性を理解し、それがその人に再現されるとその人の品性となり、これを神に帰すると栄光になります。

では、キリストのご品性とはなんのでしょうか。

「愛さない者は、神を知らない。神は愛である」(ヨハネ第一 4:8)。「すべての人を照すまことの光(イエスのご品性)があつて、世にきた」(ヨハネ 1:9)。この「まことの光」が人のうちに再現されたとき、それが種になります。

「神の戒めを守るとはどういうことか、すなわちそれはキリストのご品性を自分たちのうちに再現することである」(祝福の山 68)。

神の戒めとは、愛することです。「わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネ 15:12)。

つまり、この戒めを守るということは、神のご品性を持っているということです（黙示録 14:12 参照）。

守るとは？＝実を結ぶこと

『「実を結び」』。みことばを聞いて、それをたくわえているものは、従順のうちに実を結ぶ。魂の中に受け入れた神のことばは、よい行ないとなってあらわれる。キリストのような品性と生活とが、その結果となってあらわれてくるのである」（キリストの実物教訓 38）。

実を結ぶとは、キリストのご品性が表れること、すなわち蒔いた種が再び種になることです。たくわえること (keep)、これが守ること (keep)、すなわち心の中で大事にする (keep)、あるいは愛情のうちに守る (cherish) ということです。み言葉を聞いて、これを心のうちに大事に守っていると、そのみ言葉は従順のうちに同じ実を結ぶようになります。

従順は、実を結ぶための土壌であり、従順がなければ、キリストのご品性という実を結ぶことはありません。従順とは、神の戒めをそのまま受け入れ、大事にする心の畑です。神の戒めを守るとは、愛情のある場所（心）に大切に保つこと、戒めを愛することです。

一方、これとは全く反対に、自己義は汚れた衣であり（イザヤ 64:6 参照）、パウロは、これを「ふん土」と読んでいます。「われわれの正しい行い」は、大事にするのではなく、捨てるべきものなのです。

「ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」（黙示録 14:12）。

場所の問題

黙示録 14:12 には、「ここに、…ある」とありますので、場所について見てみましょう。

「わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。イエスは女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」（ヨハネ 4:20, 21）。

場所は大切です、しかし、イエスは何を強調しておられるでしょうか。

「あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るからである。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである」（ヨハネ 4:22-24）。

そうです、まことの礼拝です。

黙示録 14:12 でも、「ここに」とあると、まず述べられているのは、彼らの状態です。場所はその次です。場所にこだわっているうちに、「神の戒めを守り」という状態をなくしてしまいます。

「ここに、聖徒の忍耐がある。ここに神の戒めを守り、イエスの信仰を持ちつづける者たちがいる」(黙示録 14:12 欽定訳)。「ここにある」のは、聖徒たちの状態、地の尊い実りなのです。では、その地の尊い実りが、どのようにして実るのか、証の書では何と述べているでしょうか。

『「農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている」(ヤコブ 5:7)。そのようにクリスチャンは、神のことが自分の生活の中で実るのを忍耐して待たなければならない。わたしたちが聖霊によって与えられる美德を祈り求める場合に、神は、わたしたちをそのような実を結ぶことができる環境(従順)におくことによって、わたしたちの祈りに答えてくださることがたびたびある。しかし、わたしたちは、神の目的が理解できなくて、うろたえてしまう。しかし、この成長と結実の過程を通らなければ、だれ一人として、このような実を結ぶことはできないのである。わたしたちのなすべき分は、神のことが受け入れて、それをしっかりと心に保っていて(keep)、みことばの支配に全く自分をゆだねる(＝従順)ことである。そうすれば、みことばの与えられた目的が、わたしたちの中に完成されるのである」(キリストの実物教訓 39)。

上記を読むとき、優先順位がわかります。「ここに」(黙示録 14:12)と言われた場所は、み言葉の種があるところです。その種が成長のために必要な過程を経るとき、実を結ぶのです。黙示録では、その種をもっているのが「神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている」女のすえの残りの子らだとあります(黙示録 12:17)。

神のご目的を第一とし、その目的のためには、み言葉の導くままに場所を変え、過程を経て行かなければなりません。み言葉を聞いたときに、それをそのまま保つことです。これと対照的にみ言葉を聞いたときに、「(それを、わたしが)実践できますように」と祈るのは、イザヤ 64:6 にある汚れた衣です。

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされることだからである」(ピリピ 2:13)。

これははっきり理解するとき「義認を受ける」準備ができます。み言葉が「主」であり、わたしは「従」すなわち、それを受けるのです。み言葉の支配の下に自分が入ることです。

み言葉の目的が完成するとは、すなわち、蒔いた種(み言葉)が再現されることです。キリストは、「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう」と言われました(ヨハネ 14:23)。

主を照らし出しました。みな自分たちの報いの時が来たと思いました。

三時になって暗やみは人々のまわりからは晴れましたが、まだ覆い隠すように救い主を包んでいました。いなくさが十字架にかかっておられるお方めがけて投げつけられているかのように見えました。その時でした、救い主は絶望的な叫びをあげられました。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか？」

大葉のチヂミ

■材料

大葉（青じそ）	10束（100枚）
小麦粉	1カップ
水	2カップ
顆粒昆布だし	小さじ1
塩	小さじ1

■作り方

1. 大葉を千切りにします。
2. それ以外の材料を加えて、よく混ぜます。お好み焼きよりもゆるく、さらさらです。
3. フライパンを中火にかけてごま油をまわし、2)を薄くのばします。ほとんど大葉です。
4. 弱火にして火が通ったら、ひっくりかえして、反対側を焼きます。
5. 焼き上がったら、たべやすい大きさに切って食べます。
- 6.

お好みでしょう油をかけてください。

粉は少なめでゆるいほうが、翌日でもやわらかいです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理



お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第50話 キリストの死(Ⅰ)

キリストはそのとうい命をささげたときに、勝利の喜びに支えられたのではありませんでした。このお方の心は苦痛ではり裂け、陰うつに圧倒されました。しかしこのお方の苦しみを引き起こしたのは、恐怖や死の痛みではありませんでした。それはこの世の罪の圧倒的な重さ、ご自分のみ父の愛からの分離の感覚でした。これが救い主の心臓を破裂させ、あれほどすみやかにこのお方の死をもたらしたのでした。

キリストは、罪びとが目覚めて自分の罪の重さを悟り、天の喜びと平和から永遠に切り離されることを知る時に感じるようになる苦悩をお感じになりました。

天使たちは神の御子によって負われた絶望的な苦悩を、驚きをもって見ました。十字架の痛みはほとんど感じられないほど、このお方の心の苦悩は非常に激しいものでした。

自然界はその光景に同情しました。太陽は正午までははっきりと輝いて

いましたが、突然にその光がかき消されたように見えました。

言い表しようのない恐怖が群衆をとらえました。呪いともののしりはやみました。男も、女も、子供たちも絶望的な恐怖のうちに地に倒れました。いなくまが時々ひらめいて十字架とそこにつけられている贖い



(43 ページに続く)